

1. はじめに

◎新グループホーム建設と資金づくり

仲間、家族、関係者みんなの願いだった新グループホームの建設が 2023 年 10 月から始まり、2024 年 3 月に完成しました。新しいホームの名前は「ひまわり荘」です。あおぞら会の仲間が決めました。

つくる会とともに取り組んだ資金づくりは、2 年 7 ヶ月もの息の長い取り組みとなりました。あおぞら会の仲間は、「自分たちの暮らしの場を一緒に作ってほしい」と恩師や知り合い、地域の方々に訴え、物品販売やイベントに寄付つき物品の販売をし、着実に資金を作りました。最初の目標 100 万円をいち早く達成し、目標額を 200 万円に上げ、取り組みを続けました。こうした仲間のがんばりは、職員や関係者を励まし、背中を押してくれました。家族会や友の会のみなさんも暑い日も寒い日も毎月焼きそばの販売や資源回収を行い、資金づくりに取り組まれました。職員は、積立やバザーを企画し資金づくりに取り組みました。全国の約 900 名の方々が、寄付やつくる会への入会、募金箱設置やクラウドファンディングなどに協力をしていただき、目標の 6,690 万円を達成しました。

このことは、私たちの活動が地域のみなさんの理解と共感を得た結果です。あみの福社会が、共同作業所のころから、きょうされん国会請願署名で毎年地域に出て全戸を訪問し、自分たちの願いを伝えたり、バザーの取り組みでは、バザー用品を確保するため依頼や受け取りに、何度も地域の中を歩いて回ってきました。資源回収も 1985 年から続いています。家族、職員、関係者がその時々の実態を地域に伝え、地域のみなさんに支えてもらいながら今日までできました。

しかし、グループホーム建設をすすめる一方で、完成を待てず暮らしの場を求めて、他法人のホームに入居された仲間もおられます。今回のホームが開所しても生活の場が保障できたのは 6 名とショートで 3 名です。今の仲間の暮らしの実態から考えるとまだまだホームはもちろんのこと、安心して地域で暮らすための社会資源（ヘルプ、訪問看護または 24 時間対応の診療所など）が足りない状況です。2020 年の将来構想では、2027 年に新ホームの建設を計画しており、この地域で暮らしたい仲間の願いを実現するため今度とも歩みを進めていきます。

◎今後 10 年（2023 年～2032 年）を見通した法人の運営

2022 年度に財政検討委員会を立ち上げ、今後 10 年の法人経営について分析をしました。その結果、2025 年より経営が厳しくなることを予想しています。一方、2020 年の将来構想では、仲間が通いたいと思える施設を目指し、2025 年に平均工賃 3 万円の新事業開始、2027 年新ホーム建設を予定、これらの実現のために、組合役員とも健全な経営について学習懇談会を行いました。

今年度は、2022 年度に赤字だった事業の見直しと単年度決算で、どの事業も黒字になるように事業内容の見直しを行いました。だるまハウスの古本喫茶「一福」は今年度をもって閉鎖をしました。ももやま（居宅・相談）は昨年度より収入増になりましたが、赤字は改善されませんでした。ほてい荘については、厨房より調理の応援を入れ、勤務体制を見直しましたが、コロナ感染症の拡大等があり、事業費支出が増え、赤字となりました。

10 年後（2032 年）のあみの福社会の仲間の収入が「障害年金と給料で 10 万円」になり、法人としても安定した経営を行うために、まずは各事業が単年度黒字になり健全な経営ができるように、事業内容の見直しを行い、法人で毎年 1,000 万円の積立を 2024 年度から開始予定です。

◎仲間の意見箱

あおぞら会より

『職員さんの言い方がきつい。決めつけてほしくないのに決めつけられる。施設に通うのがしんどい』という投書があり、以前にも同じような投書がありました。

またこのような投書があり改善がなされていないのではないかと思います、仲間全員にアンケートを取りました。仲間の実際の思いをまとめたので、改善をお願いします。

と、要望書が出されました。

あおぞら会会長から「数年前にも仲間から出された意見と同じことが未だ日々の支援の中であるということは、職員さんたちはあの時、何を話し合ったのですか？」と厳しい質問も出されました。仲間の声を真摯に受け止め、事業所毎に改めて自分たちの仲間に対する支援を振り返りました。法人としては職場の環境、職員の実態、仲間の実態をつかみ、分析、仲間が大切にされる実践ができるよう今後も検討していきます。3月のあおぞら会の役員会に各事業所の管理者と法人事務局長が出向き、話し合いの結果を報告しました。

◎コロナ感染症対応

5月より5類になり、インフルエンザなどの感染症と同じ対応になりました。これまでの生活が戻り、良い面もたくさんありました。しかし、感染防止の側面からいうと、対応が緩やかになり、みんなの気持ちも緩やかになったため、年末から1月にかけて法人内のクラスターを防ぐことができませんでした。

ホームの感染症が広がった場合、長い期間仲間の通所を制限することになります。仲間の命と暮らしを守るため、日ごろから、感染した仲間と感染していない仲間を離して対応するための場所の確保をしておく必要がありましたが、今回は、場所の確保をしていなかったため、仲間に長い期間のホーム待機をお願いする結果となりました。

来年度は感染症対策委員会の設置も行い、事業所内の予防策と感染が確認された時の適切な対応についてのBCP計画を作ります。

《あみの福祉会・桃山の里「基本理念」(2002年1月制定)》

私たちは、共同作業所づくり運動の成果と教訓を大切にしながら、新たな発展を築くことを目標に、以下のことを施設開設の基本理念とします

- 1 障害のある人たちが、社会の一員として、自らの意思や願いにより、自分の人生を切り開いていく力をつける実践をめざします
- 2 障害のある人たちが、生きがいと誇りのもてる地域社会をめざして、地域の関係団体との連携に努めます

1、2023年度の重点課題

(1) 新しいグループホーム建設と実践の中身作り

2024年4月の開所をめざし、ホーム建設に着工します。また、計画的に職員を採用し、入居予定の仲間の願う生活を一緒に描きます。

➡暮らしのプロジェクトのメンバーを中心にホーム開所に向けてハード面では、設備や備品の検討など行いました。ソフト面では、入所者の決定、職員体制や日課の検討、開所に向けて準備を進めました。(プロジェクトのまとめ参照)

(2) ホーム建設のための資金づくり

グループホーム建設の資金づくりは、目標の60%に達しました。「京丹後市にどんな

障害のある人も暮らすことができるグループホームをつくる会」と一緒に広く地域づくり運動につなげ、残り 40%の資金づくりを進めます。

➡資金づくりの目標額達成のため、仲間は引き続き「手焼きの辛皮せんべい^{からかわ}」や寄付つき物品の販売を行いました。職員も仲間、家族とともに心を一つにしてがんばりました。また、つくる会と共同で、毎月第2金曜日を一斉行動の日と位置づけ、仲間と一緒に募金箱の入れ替えや寄付のお願いに地域を回りました。つくる会の新聞チラシが出てから、更に地域の方々の寄付が多く集まり、目標の 6,690 万円を達成しました。私たちの活動を丁寧に発信していくことの大切さを改めて感じました。(プロジェクトのまとめ参照)

(3) 給料保障と仕事保障(新しい仕事づくり)

「障害年金と給料で月 10 万以上」を保障するために事業所の枠を越えて、新しい仕事づくりを検討します。

➡2019 年将来構想検討委員会を再開にあたり、仲間、家族にアンケートを実施しました。仲間の約 82%、家族の 83%が「今の生活に不安がある」という回答でした。その主な理由は「経済的な不安」「給料が安い」「親の高齢化」です。また、「あみの福祉会に今、必要だと思うもの」の問いには 23%の仲間が「もっと給料がもらえる施設」という回答でした。2022 年度は「もっと給料が欲しいからサークルより仕事をした」「給料(時給)を 10 円上げてくれたら、もっとがんばる」という仲間の切実な声もあります。この仲間の声を真摯に受け止め、高い給料を保障するプロジェクトを中心に取り組みを進めてきました。

2022 年度までの将来構想検討会で提案された事業展開について検討、今後の具体的な事業展開の方向を各事業所に提案しました。また、新たな事業展開としては、①地元の銚子山今整備に関連し、丹後の歴史に沿った商品展開の検討②一般就労をめざす仲間の働く場としての厨房業務の補助作業を検討してきました

(プロジェクトのまとめ参照)

(4) 各事業所が健全経営を行います

事業所毎の管理者が中心となって会計を行い、事業所の経営についての実態や課題が職員の共通のものとなるように努めます。

➡月次決算の報告し、事業所毎に分析を行いました。また、2022 年度赤字事業については、改善策を検討しました。

- ・こぴーぬは、立ち上げ当時の計画通り就労会計で職員 1 名の給料を支払いました。
- ・だるまハウスの古本きさ「一福」は今年度をもって閉鎖をしました。
- ・ももやま(居宅・相談)は昨年度より収入増になりましたが、当初の予定通りに資格取得が進まず、請求ができない支援があり、赤字は改善されませんでした。
- ・ほてい荘は、事業費が膨らみ赤字の改善となりませんでした。

(各事業所のまとめ参照)

2、具体的な取り組み

(1) 仲間の願いを大切に一人ひとりが輝く実践を行います

➡あおぞら会の意見箱は、仲間が自分の困ったことを発信できる取り組みです。今回、職員の支援で嫌な思いをしているという要望が出されました。あおぞら会の中でアンケートを実施し、みんなの思いを聴きとり、要望書を作り、法人へ提出されました。仲間が誰に対しても自分の困っていることを伝えられることは、仲間が生きる力をつけたということです。一方職員は、もう一度基本に立ち返り、「自分たちの仕事は、だれのための何のための仕事か」を考える機会となりました。

➡(各事業所の事業報告参照)

(2) 仲間の願いを実現するための健全な法人運営を行います

	内 容		内 容
4月	理事会	10月	理事会
5月	理事会	11月	
6月	理事会、評議員会	12月	
7月	理事会	1月	理事会
8月		2月	
9月	理事会	3月	理事会、

⇒今年度は、臨時職員 3 名を採用しましたが、残念ながら 2 名が退職されました。正規職員については、応募がなく、採用できませんでした。

全職員会議については、いろいろな勤務形態があるため、全員の参加は難しいですが、勤務の応援体制を組みながら、暮らしの場の職員が全職員会議に参加できるように配慮しました。しかし、参加者が減ってきている実態があります。毎回の会議で全職員に何をわかしてもらおうのかを明確にした会議運営をしていきたい。

(3) 障害のある人が生き生きと自分らしく暮らせる地域づくり

⇒新しいグループホーム建設資金づくりが達成できたことは、仲間が先頭に立って「自分たちの暮らしの場を一緒に作ってください」と訴えたことが地域のみなさんの理解と共感を得た結果だと思えます。共同作業所開所から 40 年間、ずっと支えてくれた守る会、家族会、友の会とともに今後も歩みを進めていきたい。

(4) 様々な感染症が施設内で拡がらないように、予防だけではなく感染を最小限に抑えるなどの対応策を検討し、仲間・家族・職員の命と健康を守れるよう努めます

⇒基本的な対応策では、再度、仲間、家族、職員にお便り等で伝え、感染が拡大しないように努めました。